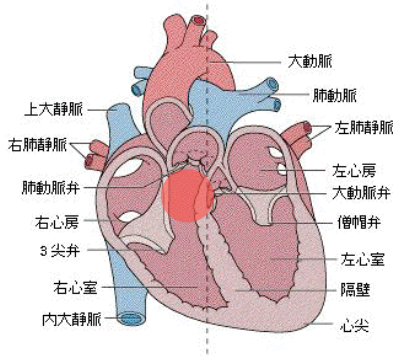


肺動脈狭窄症

Pulmonic Stenosis (PS)

犬に多く見られる先天性心臓疾患で、肺動脈弁狭窄と言われることもあります。

全身に送られた血液は心臓へ戻ってきますが、まず、右心房から右心室に入り、肺動脈を通して肺に運ばれ酸素化されて再び全身へと送り出されます。肺動脈狭窄とはこの肺動脈の入り口、特に肺動脈弁の部分狭窄(狭くなること)により起こる病気です。



原因

多因子遺伝の可能性が指摘されています。犬の先天性心疾患で3〜5番目に多く、先天性心臓疾患と診断されたうちの20%が罹患していると言われるほど発生頻度の高い心疾患です。

症状

症状は狭窄の程度により異なりますが、軽度から中程度であれば一般に無症状なこともあります。ワクチンや健康診断で動物病院を訪れた時に聴診により心臓の雑音が発見されることが多い病気です。重傷になると、疲れやすい、元気が無い、ふらつく、舌の色が白っぽい、興奮した時に発作を起こして倒れるなどの症状が見られます。また、心房中隔欠損が合併すると症状はより重篤となりチアノーゼなどもみられるようになります。

診断法

まずはワクチンや健康診断で動物病院を訪れた時に聴診により心臓の雑音が発見されることが多い病気です。心臓の雑音の形、位置などから熟練した獣医師であれば仮診断することもできます。但し、同じ音の雑音でも無害のものや貧血が原因で起こっていることもあるので詳しい検査は必要です。その後確定診断と病気の進行度をみるためには超音波検査、心電図検査、レントゲン検査などを行います。以前は心臓の造影検査などを行っていましたが、今ではカラードップラーとよばれる高性能な超音波検査器機が用いられるようになり安全に診断できるようになりました。手術が適応と判断された場合は心臓カテーテル検査を行いその適応を見極めることが必要になることもあります。



特徴的な心雑音[収縮期駆出性雑音]を聞く▲

治療法

この病気は内科的には治療できる病気ではありませんが、軽度の場合は症状を緩和、安定するために各種薬剤の投与を行います。症状を伴う場合の根本的な治療は、外科的手術を行います。バルーンとよばれる風船のような器具で狭くなった肺動脈を膨らませたり、直接手術により肺動脈を広げることもあります。特に未成熟の場合はなるべく早期に手術を実施すべきとされていますが、年齢によっては手術の適応とならないこともあります。

自宅での看護法

内科療法の場合は指示された薬をきちんと定期的に飲ませる必要が有ります。その他は主治医の先生の指示に従ってください。心臓疾患の場合は過度の運動が心臓に負担をかけることとなりますので、指示に従い制限をする必要もあるかもしれません。

予防法

予防法はありませんが、早期に発見すれば手術など対処できることもありますので、仔犬、仔猫の飼育をはじめたらすみやかに動物病院を受診して健康診断を受けることがその手助けになるでしょう。また、メモに記載していますが、遺伝が疑われている犬種もありますので、購入時に血統などを調べられればリスクを軽減できるかもしれません。

メモ

犬では、ミニチュア・シュナウザー、ビーグル、ボクサー、ジャーマン・シェパード、イングリッシュ・ブルドック、チワワ、サモエド、テリア種に多く見られるという報告があります。